

# 水と音楽

— 楽器を中心に —

石 黒 吉次郎

専修大学名誉教授

## 一 はじめに

1 G・F・ヘンデルに組曲「水上の音楽」(Water Music 一七一七年)がある。イギリスのジョージ一世のテムズ川舟遊びの際に作られたものであるという。日本でも平安時代に龍頭鑄首と称する船があつて、貴族達が楽人を船に乗せて、雅楽の演奏をさせたりなどして楽しんでいた。こうした有名なことのほかにも、水と音楽の関係はさまざまな面があると思われる。ここでは楽器との関係でこの問題を考える。楽器はその音と水の音が類似すると考えられたようである。例えば六朝時代の『搜神後記』の話に、盧江の箏笛浦に大きな船が沈んでいた。昔曹公という者が歌妓数人と酒宴を開いているうちに、船が水底に沈んでしまった。そこで箏笛浦と呼ばれるようになったが、今も箏や笛の音がするという。日本にも山梨県に笛吹川という川がある。また一方では音無川という川名も各地に

あるが、伝説では『日本霊異記』巻上・第五・三宝を信敬したてまつりて現報を得し縁に、和泉の国の海中に楽器の音声があつた。笛・箏・琴・箏篋の音のようであつた。ある時は雷のようであり、昼は鳴り、夜は輝いて、東をさして流れていったとある。これも水と楽器の関係を物語るものであるが、後に述べる中国の思想の影響があるようである。

こうして水に關しては、さまざまな民俗学、文化人類学からの解釈がある。たとえば昔話の「機織り淵」では、淵や池の底から機を織る音が聞こえてくるが、それは水中で女が機を織っているのだという伝説で（『日本昔話事典』）、これは折口信夫の「水の女」の論にも通じる。以下こうした伝承をも念頭に置きながら述べる。

## 二 鐘をめぐつて

鐘は日本人には日常的に馴染みのあるもので、「高砂の尾上の鐘」（『千載集』冬・大江匡房、謡曲「高砂」）のように古来文学等に現われ、また歌謡「朧月夜」「鐘の鳴る丘」のように歌謡にも歌われてきた。鐘には様々な種類・用途がある。たとえば「宮鐘」は宮中で漏刻によって時を測り、鐘で知らせるためのもので、菅原道真の漢詩「雪中早衙」にも見える。

鐘をめぐつては、鐘ヶ淵、鐘の岬等の地名にあるように、水辺と関わる楽器とする伝承がある。『日本伝記伝説大事典』（角川書店）の「鐘ヶ淵」によると、日本各地にこの名の淵があつて、寺の鐘や陣鐘などが何らかの理由で淵に沈み、それが時に鳴ることがある。またそれが災いと呼んだり、不思議な現象を起こすとされるもので、「沈鐘伝説」と称されるとある。福岡県宗像市の鐘崎がよく知られていて、上方舞「鐘ヶ岬」は初世中村富十郎が江戸

の「京鹿子娘道成寺」によって、宝暦九年（一七五九）十二月「九州釣鐘岬（かねがみさき）」として演じたものがもととなっている。<sup>①</sup>この鐘崎は貝原益軒の『筑前国続風土記』宗像郡の鐘御崎（鍾崎町）に見える。現在の玄海町に存在する。昔三韓より大きな撞き鐘を渡したところ、それがこの海に沈んだ。そこで鐘の御崎という。今も沖の方五町ばかりの所に沈んでいて、時にそれが見えると里人が云うとある。これは海中の岩が鐘の形をしているためであろうか。同書は越前国敦賀郡金ヶ崎にもふれ、この海にも朝鮮から渡った鐘の沈んだところがあり、地名となったとし、鐘の御崎を詠んだ古歌を四首あげるが、『新古今集』巻六にあるとする。「白波の岩打つ音やひゞくらん鐘の御崎のあかつきの空」（衣笠内大臣）と『家集』にあるとする。「おとに聞かねの御崎はつきもせずなく声ひゞく渡りなりけり」（俊頼）の二首には、岩を打ったりしては音を鳴らす海の流れに鐘のイメージを持たせている。

沈鐘の趣向を江戸の小説に求めると、合巻『白縫譚』初編に、菊地秀行が釣鐘を担いで筑紫沖で入水する。子の貞行が漁師春吉の助力を得てこれを引きあげるといふ筋立てがある。実録物の『黒田騒動』お秀の方右衛門佐殿へ奢侈を勧むる事並鐘ヶ崎の館を引払んと爲る事に、唐の商船が沈没して海中に沈んだ鐘を黒田忠之が引き上げようとして失敗する話が見える。<sup>②</sup>これも九州の鐘崎の話による。東京都江東区亀戸の真言宗寺院普門院の伝説では、江戸時代に橋場（現在の台東区内）からこの地に移る際に、誤って鐘を隅田川に沈めてしまった。これが墨田区の鐘ヶ淵の地名となっているという。江戸時代には沈鐘伝説がさらに展開しているのである。青森県五所川原市の曹洞宗長円寺に伝わる沈鐘伝説は特異である。長円寺と同所の長勝寺は末寺と本寺の關係にあり、正徳五年（一七一五）両寺で夫婦鐘を造ることになり、京都に発注した。完成して船で運んだが、陸奥の七里長浜で大荒れの怒涛に遭い、乗員もろとも海に沈んだ。生き残りの船員の案内で海中を探索し、長円寺の鐘は無残な姿で見えられたが、長勝寺のものはいかに見つからなかったという寺伝がある（徳永隆平『物語の寺』冬樹社、昭和五十六年）。沈鐘の実例

のように思われる。

明治以降、日本ではハウプトマンの戯曲『沈鐘』が知られたこともあって、沈鐘伝説の研究が進んだ。高木敏雄『日本伝説集』（筑摩書房、大正二年）には日本のこの伝説の十三の例をあげ、大藤時彦「沈鐘伝説」は日本各地の沈鐘伝説を網羅的に集め、特に竜神との関わりで論じている。<sup>③</sup>

この沈鐘伝説は世界各地にあるようである。松村武雄編『中国神話伝説集』（教養文庫）の「沈鐘伝説」には、『淵鑑類函』『道州志』『天中記』『異地記』『搜神後記』の例をあげているが、特に『淵鑑類函』からは三話採っている。今その一話を例にあげると、ある寺の鐘が蛟（みずら）の形をしていて、ある夕方、その鐘が動き出し、寺の前の潭に飛び込んだ。人々がそれを引き上げると、本当の蛟となっていて睨みつけた。みな怖がって逃げ去ると、また鐘は水に沈み、今でも水底から音を発するが、その時は山や谷が振動するくらいである、というものである。

ハウプトマンの戯曲『沈鐘』（Die Versunkene Glocke、一八九六年）は、山の寺院に鐘が吊るされると、ガンガン鳴らされ、山中の魔物が呪い殺されることになる、魔女から聞いた森の精は、鐘を載せて運んでいた車の輪を壊した。鐘は坂を転がり落ち、深い湖の底へと沈んでいった。ところがその鐘が湖の底で鳴り出すというものである。この沈鐘は、牧師によれば神の僕で平和と永遠の愛の響音をもって、恩寵の福音をあまねく鳴り渡す使命であったが、今は鑄鐘師にとっては呪いのごとく鳴り出すのである。山や森は自由で永久の生命を持つ世界で、これに対し人間世界は世俗的な労働苦の世界ということであるが、人々に幸福をもたらすはずである鐘が水底に沈み、音を発すると、それは不吉に響き出すことになる。この沈んだ鐘の不気味さは、深淵の水音の性質によるものであろうか。ハウプトマンは日本では早くから関心が持たれ、森鷗外によるハウプトマンの伝記等の研究があり、明治四十年（一九〇七）に登張竹風・泉鏡花訳の『沈鐘』が出ている（山岩波書店刊鏡花全集第二十五卷所収）。大正七年（一

九一八)には島村抱月の芸術座で楠山正雄訳の「沈鐘」の公演があり、松井須磨子が森の娘役で出演した。大正十四年にも小山内薫の研究座で同訳の「沈鐘」が上演された。<sup>(4)</sup>大正七年には大阪道頓堀弁天座で永本徳子一座の興行もあった。童話的な趣もあるこの戯曲が一時流行したようである。そして早くも明治四十五年新村出がその著『続南蛮広記』の「沈鐘の伝説」で、筑前国鐘ヶ崎伝説とハウプトマンの『沈鐘』との比較考察が行った。

このドイツの沈鐘については、最上孝敬氏が取り上げていて、ウィル・エーリッヒ・ポイケルト編の『ドイツ伝説集』『シュレジア伝説集』を利用している。<sup>(5)</sup>ほかにルードヴッヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』では、三八八話「鐘の湖」(Der Glockensee)に、モーリンゲンの町の庭園に「生贄の池」と呼ばれるものがあった。修道士達が鐘を铸造したが、洗礼をしなかったために、この鐘は教会の鐘楼からこの池に飛び込んだ。そこでこの池は「鐘の湖」と呼ばれることになった。降誕祭(クリスマス)の夜にこの鐘は一時間ほど鳴り、天気が良いと時折姿が見えたとある。ほかには七一二話「沈んだ教会」(Die Versunkene Kirche)に、コーブルクの町近くのラウター川の谷に、神の怒りで沈んだ教会があり、万霊節にはその沈んだ教会の鐘が鳴るといふものがある。<sup>(6)</sup>ドイツの鐘にまつわる伝説としては、铸造師の話、予兆(吉兆もあれば凶兆もある)としての鐘の話などがあり、鐘は神聖なものとされているようである。

フランスの沈鐘伝説についても最上氏がポール・セビョーの『フランスのフォークロア』を利用して論じているが、その他にはドビュッシーのピアノ曲がある。「映像第二集」第一曲「葉ずえを渡る鐘の音」という木の葉をゆすりながら渡ってゆく鐘の音の曲があり、ついで「前奏曲集」第一巻・第十曲「沈める寺」がある。これはブルターニュ地方に伝わる伝説に、海底に沈んだイースの町の寺院が、晴れた日に姿を現わし、鐘の音や聖歌が聞こえ、再び沈むというもので、この伝説による曲である。<sup>(7)</sup>

水中の鐘を引き上げる例もある。「太平記」卷十五・竜宮城鐘の事には、三井寺の鐘は藤原秀郷が近江の勢田の橋を通りかかり、大蛇に遭う。その懇願によつて琵琶湖に入り、水中の竜宮城に至った。そこで百足を退治し、竜神から赤銅の撞鐘をもらい、これを三井寺に献じたという有名な話があり、類似のものに『俵藤太物語』があり、謡曲「三井寺」にもこの話が見える。これも道成寺説話に似るものがある。

さらに水と鐘の関係を日本ではどのように考えたかを、『塵荆鈔』卷十・楽器等之事を見る。

鐘者、礼書ニ鳧氏造始。故ニ鳧鐘ト云。山海経ニハ、炎帝ノ孫、伯岐造始ト。呂氏春秋ニハ、黄帝伶倫ニ命ジテ始テ十二鐘ヲ鑄テ、十二律ヲ司シムト。

とまず鐘の創始者の説をあげるが、これは漢籍によく見え、日本での創始論にも影響を与えた。次に、

文選云、鐘ヲ鯨ト云、又蒲牢ト云。註云、海中ニ大魚在リ、名ハ鯨。大獸在リ、名ハ蒲牢（ラウ）。大二鳴者也。故ニ鐘ノ上ニ蒲牢ヲ鑄トナリ。又竜ヲモ鑄（イ）ル故ニ、竜頭ト云。毛詩云、鐘之九乳（ニウ）ハ九州ニ法（ノ）ル。又豊嶺ニ九鐘アリ。霜降ル則ンバ、自鳴ル故ニ、霜ニ和シテ鳴ト云。<sup>8)</sup>

とあって、鐘は海中の鯨・蒲牢という大魚がいて、鐘はこれが鳴く音に似ているからとある。「鯨鐘」という言葉があり、これは釣り鐘のことで、「鯨音」も梵鐘の意になる。「鯨」には撞木という意味もあり、これは撞木が大魚の形に似ているからという（『大漢和辞典』等）。「文選云」とあるのは、『文選』東都賦の一節に、「於是発鯨魚、鏗華鍾」とあるのによるのであろう。鯨魚の形をした撞木で、飾り模様のある鐘をつくという意味である。「蒲牢」は『大漢和辞典』では班固の「東都賦」の注によって、海獣の名で鯨を恐れ、襲われると大声で鳴く。大きな鐘の音が欲しい時は、この形を鐘の上に造る。そこで鐘の異称でもあるとしている。「竜頭」は釣り鐘の上にある竜の頭の形をしたもので、そこで梁に懸ける。一般に器物の装飾に竜頭（りゅうとう）を刻したものをを用いることがあ

り、これを「たつがしら」といい、特に兜の前立てに飾りとして用いるたつがしらもある。従ってここに鐘と水(竜・水神)の關係がうかがわれる。また「木魚」があり、「魚板」がある。後者は魚の形に彫った木の板で、禪宗寺院でたたいて時刻を知らせるのに使用される。これらは鯨と鐘の關係をも想起させる。ただし百田弥栄子氏は中国では竜宮の宝物は銅鼓であると述べている。<sup>9)</sup>

『燕京歲時記』正月・大鐘寺の項に、

大鐘寺は本名を覚生寺といい、大鐘によってその名を得たのであろう。思うに年中降雨を祈る処である<sup>10)</sup>とあるが、大鐘が祈雨と關係するものとも察せられる。中国における雨乞いについては、百田氏が湖南省湘西州鳳凰の苗族の例を紹介して、二本の弦を張った竹製のものをも木槌で音を出して雨を呼ぶとしている。<sup>11)</sup>ただし韓国新羅時代の奉徳寺や上院寺の鐘は、音色がすばらしく、鐘の形も勝れているので愛されているという。

さて鐘は水と關係するので、日本においても雨乞いに用いられた。笹本正治氏によると、岐阜県高山市の水無(みなし)神社、福岡県田川市の浄土寺、熊本県山鹿市の日輪寺等々十七例を数えるという。<sup>12)</sup>この鐘と水の關係は、『道成寺縁起絵巻』や能「道成寺」では、日高川という水、女、鐘に關わってゆく。<sup>13)</sup>また鐘の上部のつり手を「竜頭」というので、中国でも鐘、竜、水は關係するというイメージができていた。

霜と鐘との關係については、『山海経』卷五・中山経には、

又東南三百里、曰豊山有獸焉、其状如蟻、赤目赤喙黃身、名曰雍和、見則国有大恐神、耕父処之常遊、清冷之淵出入有光(清冷水在西、号郊泉山、山上神来時、水亦有光耀、今有屋祠之) 見則其国為敗有九鍾焉、是知霜鳴(霜降則鐘鳴、故言知也、物有自然感応、而不可為也)<sup>14)</sup>

とある。国会図書館蔵の奈良絵本「玉もの前」にも、

又かねては、いかなる人のつくりはしめて候そ、ととへは、ふしといふ人のみはしめて候、ふさんといふ山に、かねは秋の霜のふり候とき、かならずなり候、とこたへけり<sup>15)</sup>

とある。この点に関しては先の『塵荆鈔』の同箇所、そして『体源鈔』巻八に類似の表現がある。後者は『李嶠百首』を引用する。

さらに『詩経』小雅・谷風之什・鼓鍾に、淮水で鐘を鼓(う)って天上の祖霊の降臨を願う儀式が歌われており、川の流れる音と鐘の音が似るのではないかと思われる。淮水には水神がおり、水神は祖霊と同じものとして祭られているという。

### 三 鼓をめぐって

鼓は木・土でつくった胴に革を張って打ち鳴らす楽器で、いくつか種類があり、太鼓もその一つである。古代の中国にあつては、鐘と対をなすもので、「鐘鼓」と並称され、先祖の祭りに使用された(『詩経』国風・周南・関雎など)。また戦に軍鼓として使われ、攻撃の合図などに用いられた。これも水との関係で考える。

後漢の『白虎通義』卷三・礼楽に、

鼓震音、煩気也、万物憤濇震而出、雷以動之、温以煖之、風以散之、雨以濡之、奮至徳之声、感和平之気也、同声相应、同气相求、神明报应、天地佑之、其本乃在万物之始耶、故謂之鼓也、<sup>16)</sup>

とあつて、鼓は天地の動きや神明に呼応するものであるとしている。

『塵荆鈔』卷十・樂器管絃等事に、



鼓者、…又鳳凰山ニ石ノ鼓アリ。此鼓自鳴時、天降り雨降ト云々。吾朝大旱ノ時、高山ニ登リ、鼓ヲ擊事ハ是ニ准歟。

とあるが、これは先の「玉もの前」にも、

ほうわうさんといふ山あり、いしのつ、み有、つ、みなるときは、空かきくもり、かならすあめふる、とこたへけり、

とある。先の『山海経』の九鍾と霜の話と似ているものである。鼓も日本では雨乞いの関係で重視されていた。「石の鼓」は石鼓を意味していると思われるが、『大漢和辞典』では、周の宣王の時に、史籀が功績を頌に作って鼓形の石に記したもので、およそ十個あるという。その文章を「石鼓文」といい、韓愈の「石鼓歌」、蘇軾の「石鼓歌」の一節を引用している。また『漢書』五行志・上に

成帝鴻書三年五月乙亥、天水冀南山大石鳴、声隆隆如雷、有頃止、聞平襄二百四十里、壘鷄皆鳴。石長丈三尺、広厚略等、旁著岸脅、去地二百余丈、民俗名曰石鼓。石鼓鳴、有兵。<sup>17)</sup>

とある。これによると、天水県冀南山に大石があつて、雷の如く鳴動した。民間では「石鼓」と呼んだ。これが鳴ると兵革が起こると言われたという。鼓の音は雷と結びついており、後漢の『風俗通義』巻六・声音に、天子の六鼓をあげて、そのうちの雷鼓は天神を祭るのに用いるとしており、これは日本の『教訓抄』巻九にも引用されている。こうして鼓は雷雨と関係するようになると思われる。日本では『日本書紀』天武天皇十三年（六八四）十月十四日に、東方に鼓のような音が聞こえたが、ある人がこれは伊豆国で神が島を造つたその響きであると言ったという。海中に噴火が起こり、島が隆起したのであった。ついで『筑前国統風土記』の奥津島の箇所に、

奥津島の磯に太鼓石とて。大岩海中に差出たり。夫木の歌によめるは此所成べし。荒舟に近し。昼夜潮の満

干に、此石に当りて鳴ひゞく。故に太鼓を打がごとし。鹽の満干しる、也<sup>(18)</sup>  
 として、さらに『夫木和歌抄』（一六七五四）の「永久四年百首」のうち、唐人を詠んだ神祇伯頭仲卿の歌「たつ波につづみの声をうちそへてから人よせくおきのしまより」を載せている（同書では「立波につづみのおとを打そへて唐人よせぬおきの島守」）。大岩に波が打ち寄せ、音を立てる様はさながら豪快な鼓打ちのように見えるわけである。

鼓が降雨と関係することは『塵荊鈔』にも見えるところであるが、室町時代の謡曲の中からこれをあげると、まず「賀茂」がある。前シテが里の女で、瀬見の小川で神に手向ける水を汲み、賀茂社の縁起を語り、神となつて姿を消す。中入のあとに御祖の神が女神の姿で舞を舞うと、後シテ・賀茂の雷神が現われ、雷鳴をとどろかす。「水」が重要なテーマとなる能で、豊年、五穀成就につながるものである。キリの部分は、

ほろくどろくと踏みとどろかす。鳴神の鼓の。時も至れば五穀成就も国土を守護し<sup>(19)</sup>。

と、雷鳴を鼓に例えるが、雷神の打ち鳴らす鼓は俵屋宗達の「風神雷神図屏風」のごとく、絵画によく現われるものである。飛鳥時代、賀茂氏は雨乞い行事を行っていたという。

能「天鼓」ももとは雷のイメージからきているかと思われる。作者は不明である。

中国後漢の時代の話で、王伯・王母老夫婦に天鼓という子がいた。母が夢中に天から鼓が降るの見て懐妊したため、この名があった。その後天から鼓が降つて来て、天鼓が打つと妙なる音を出した。帝がこれを所望すると、天鼓はこれを嫌つて山中に隠れたが、ついに見つけ出されて呂水の江に沈められ、鼓は内裏へ渡つた。

しかし鼓は打てども音を出さず、王伯が召されて打つと音を出した。その後帝は死去した天鼓を哀れみ、呂水の江で管絃講でこれを叩いた。するとそこへ天鼓の霊が現われ、鼓を打っては喜び戯れ、明け方姿を消していっ

た。

「金札」も空から金色の文字で書かれた札が降ってくる能であり、中世好みなのであろう。管絃講は『源平盛衰記』巻三十二福原管絃講事があり、『糸竹口伝』にも管絃講之次第がある。『吾妻鏡』文永二年（一二六五）三月九日条にも見える。能「経政」にも見られ、永享十二年に南都で行われた記録もある（管絃講并延年日記）日本庶民文化史料集成第二巻所収）。この能の古態性を考えると、南都で作られた南都好みの曲の可能性はないであろうか。舞楽重視が延年風である。能「海人」と似た趣きも感じられる。「呂」は音楽を思わせる語で、しかも「呂水の江」は鼓と水の関係を示していると思われる。この能については小林静雄氏や竹本幹夫氏の論考があるが、野尻抱影氏はこの能の典拠に、『晋書』天文志の「河鼓三星、旗九星、在牽牛北、天鼓也」をあげている。<sup>21</sup>さらに石田博氏は『抱朴子』に天鼓は雷のこととあることを指摘し、ただし『史記』天官書・『漢書』天文志には、雷の音に似ているが雷ではなく、兵乱の予兆の音であるとしていることをあげている。さらに『晋書』では軍事を司る星の名とすること、『後漢書』天文志・五行志に隕石が雷鳴に似て天鼓と呼ばれたことなどに言及している。「天鼓」の話に近いのは、『後漢書』の王喬伝のようである。<sup>22</sup>ともかく天鼓は『大漢和辞典』によれば、牽牛の北に三星があり、それぞれ何鼓、天鼓、黄姑というところであって、牽牛・織女伝説と関わるものである。この「河鼓」は天の川近くにある鼓の意味で、水との関係はないのであろう。ここでは星と雷とイメージが重なっているように思われる。『宋史』天文志には「流隕」という言葉も見える。これらは先の石鼓にも関係することである。さらには先の『日本霊異記』巻上・五話の和泉の海中の楽器を思わせるものである。

一方仏教では各種仏教語辞典に「天鼓」の項目は見当たらず、仏教語には入らないが、『法華経』序品に、「天雨曼陀華、天鼓自然鳴、諸天竜鬼神、供養人中尊」、化城喻品に「諸天擊天鼓、并作衆伎樂、香風吹萎華、更雨新好

者」<sup>22</sup>、如来寿量品に「諸天擊天鼓、常作衆伎樂、雨曼陀華、散仏及大衆」、分別功德品に「於虛空中、天鼓自鳴、妙声深遠」とある。これも雷が鳴り響いて雨を降らせたことをいうもので、日本の天鼓観には『法華経』の影響もあったことであろう。あるいは漢訳の段階で、中国の「天鼓」をイメージして訳がなされたことも考えられる。天鼓の日本における受容は、『神道集』巻四・第十七・信濃国鎮守諏訪大明神秋山祭事に、神通力を持った悪人高丸は田村丸將軍に退治されたが、最期には雷のようにわめきちらした。その高丸のもとに不思議な鼓があり、自然に鳴り出して吉凶を知らせ、そこで高丸は一度も失敗はしなかったという物語がある。戦国時代の『法華経直談鈔』第二末・天鼓事には仏教的な天鼓の理解がある。これはこの書が『法華経』の注釈・解釈だからで、それで「天鼓」が取り上げられたのである。

取<sup>レ</sup>夫<sup>ニ</sup>天鼓自然鳴ノ事長行<sup>ニ</sup>无<sup>ニ</sup>此文<sup>ニ</sup>凡此天鼓<sup>ト</sup>者大梵天鼓也此鼓<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>打<sup>テ</sup>自<sup>ラ</sup>鳴也疏云鼓自鳴事<sup>ハ</sup>表<sup>ス</sup>无問自説<sup>ラ</sup>也<sup>23</sup>

これは能「天鼓」の成立とも関係が深いように思われる。「天鼓自鳴」の解釈に苦勞をしているようである。京都大学国史研究室蔵「応永二十八年十月維摩会講師房引付」に「大風流 天鼓之鼓尋事」が見えるが、これは興福寺延年の記録で、中国に天鼓を尋ねてゆく風流なのであろう。「天鼓」に現われる管絃講で『法華経』の天鼓と結びつく可能性がある。

さらに考えると、能の「天鼓」に日本の落雷のイメージの伝統を求めると、『日本書紀』雄略天皇七年七月条に、天皇が三諸岳の神を見たいと思ひ、少子部連螺贏に命じて捕らえさせた。彼は三諸岳から大蛇をつかまえてきた。天皇がこれを見ると、雷の音がして目が輝いた。そこでこれを岳に逃がし、名を変えて雷（いかずち）の岳としたという。この話は『毛詩』等中国の影響が指摘されている<sup>25</sup>。蛇は水神で雷を司るという考えである。『日本霊異記』

第一・雷を捉へし縁によると、雄略天皇の命を受けた少師部栖軽が空に勅命を告げると、豊浦寺と飯岡の間に鳴電（なるかみ）が落ちたとある。つまりここでは雷神は王権との関わりで捉えられており、「天鼓」のテーマと似ていることになる。早魃や降雨も、王の徳の有無と関係することであった。天皇と皇后の婚合中に栖軽が入室してきたという話の冒頭も、豊作に結びつくもので、この話の背景には、天皇の雨乞いを思わせるものがある。

次に直接鼓が水と関わるものとして、番外謡曲「鼓の滝」を取り上げる。鼓の滝は神戸市中央区葺合町の布引の滝の一つで、名所となっている。

鼓の滝に花見にやって来た都人（ワキ）は、そこで老人（前シテ）と会うが、彼こそ滝祭りの老人で、かつ山神であり、やがて滝壺に姿を消す（中入）。神（後シテ）が現われて舞を舞って御代をことほぐ。

ここでは滝が鼓の音を奏でる。「落つや滝浪も。とうくと。うつなり。く。鼓の滝」「手風足拍子の鼓の滝に」に滝の音を背景に舞を舞う趣向がある。布引滝は浄瑠璃「源平布引滝」でも知られる。この能は『梁塵秘抄』四〇四の「滝は多かれど うれしやとぞ思ふ 鳴る滝の水 日は照るとも…」を思わせるが、この歌謡は中世流行したことと知られる。京都には鳴滝の地名もある。また滝が鼓のように鳴るといふ和歌は各地で詠まれたようである。『拾遺和歌集』雑下・五五六に、

清原元輔肥後守に侍りける時、かのくにのつづみのたきといふ所を見にまかりたりけるに、ことやうなる法師のよみ侍りける

おとにきくつづみのたきをうち見ればただ山河のなるにぞ有りける<sup>(26)</sup>

とあり、この歌は『重之集』（二七三三）、『檜垣姫集』（九）にも見えるが、熊本市の西方河内川の溪谷の由である。山川の水音は鼓のように聞こえるという考えが定着したのである。そこには山水の豊かさや、雷鳴の轟きのイメ

ージが付与されていたのであろう。鎌倉時代中期の『為忠集』（七六）の、  
 或屏風の絵に、おほきなる滝のかたをかきけるをみて、よみはんへりける  
 さみだれにつゝ、みのたきの水まさり岩うつをとはたん／＼となる<sup>27)</sup>  
 は屏風絵ということである。『湯山聯句鈔』六一にも、

有<sub>レ</sub>谷鎌倉近 其流鼓瀑鳴

湯ノ山ニ鎌倉谷ト云ガアルゾ。撰州ニ鼓ノ滝ト云処ガアルゾ。名所デアルゾ<sup>28)</sup>

とある。この作品は撰津国有馬温泉での連句で、近くに鎌倉谷という所があり、その滝の音が鼓に聞こえた。また撰津の布引滝の鼓の滝は名所だとしている。『古今集』雑歌上には「布引の滝にてよめる」という在原行平の歌（九二二）、「布引の滝のもとにて、人々あつまりて歌よみたりける時によめる」という在原業平の歌（九二三）がある。小林幸夫氏は『拾遺集』等に見える「おとにきくつづみのたきを…」の歌の後に謡曲「鼓の滝」が作られ、その謡曲が流布してこの和歌を元とする狂歌・戯笑歌の系譜ができていったとする<sup>29)</sup>。

「滝の音はすなわち鼓の音」は謡曲「養老」などにも見られるが、これは能で実際に鼓を使用するためであろう。観阿弥作の「自然居士」には、鞆鼓の舞の後、

地「もとより鼓は、波の音、寄せては岸を、どうどは打ち、雨雲迷ふ、鳴る神の、とどろとどろと、鳴るときは、降り来る雨は、はらはらはらと、<sup>30)</sup>

とあり、「藤水」の鞆鼓の舞にも繰り返される。当時の流行歌であろうか。世阿弥作の「難波」のキリは四天王寺の舞楽を連想させる舞楽尽しとなるが、海辺の鼓がテーマで、秋風楽を秋風もろともに波を響かしてどうと打ち、青海波を青海の波を立ててどうと打ち、「今の太鼓は波なれば、寄りては打ち、返りては打ち」と続く。鼓と波の

連想である。能「岩船」には「宝を寄する波の鼓」「天の探女か、波の腰鼓」「ていたうの拍子」とあり、波の鼓は水をイメージさせて、豊作を意味するめでたい言葉であった。天の探女は水の女神の性格もある。

「ていたう」は鼓の擬音語で、『梁塵秘抄』二六五「金の御嶽にある巫女の、打つ鼓、∴、ていとんとうとも響き鳴れ」ともあり、『一言芳談』巻下には「かななぎのまねしたる、なま女房の、∴、ていとんとうとも響きうちて」、御伽草子「浜出草紙」には「ていとうの鼓の音、さつ／＼の鈴の声々に」とあって、中世におけるパターンであった。日本では鼓はもまた水との関係が重視され、祈雨行事にも関わって、謡曲に反映しているものと思われる。

江戸時代の『謡曲画誌』巻七「和布刈」の説明文の中に、南北朝時代の後光厳院の頃、七月に近畿地方で地震があり、阿波の鳴門の海水が引いて、岩の上に太鼓が現れたという伝承を記している。海底に太鼓があつて、海潮音を発生させていたという。『筑前国続風土記』の奥津島の太鼓石と同様の話である。

近松門左衛門の浄瑠璃「堀河波鼓」は「松風」の謡鼓に始まって、夫を持つお種が鼓の師匠宮地源右衛門と不義の仲となる。お種は自害し、夫小倉彦九郎は上洛して堀川に住む源右衛門を討つというもので、波と鼓の関係を背景としている。

地名としては広島県の宮島に「鼓の浦」という地名がある。

#### 四 笛

楽器の中でも水と関係するのは笛であろう。『教訓抄』巻八・横笛に、漢の武帝の時代に丘仲が造ったなどと記

した後に、

昔竜ノナキテ海ニ入ニシヲ聞テ、又此ノ音ヲ聞バヤト恋ヒワビシホドニ、竹ヲウチ切テ吹タル音、スコシモ  
一タガハズ似タリ。…此故ニ笛ヲ竜鳴<sup>(31)</sup>云。

とある。『統教訓抄』第十一冊に太笛（長笛）に「長笛賦」の引用がある。この賦は馬季長（馬融）の作で、『文選』賦篇の音楽に載るものである。『統教訓抄』第十二冊・横笛ノ事により詳しく、

文選注引<sup>(32)</sup>鄴中記、馬融（字季長、扶風ノ人也、右京名也）暁天ニ堤ノ上ヲ行ニ、二竜水中鳴、二声ノ後天  
ニ登ル、其音甚以奇妙ナリ、仍猶堤ノホトリニ居ストイヘトモ、其声ヲキカス、後ニ木ヲ巧（切イ）テコレヲ  
吹ニキニス、又竹ヲ鑄テコレヲ吹ニ、其声アヒニタリ。横笛是ヨリ始マル<sup>(32)</sup>。

と、『文選』の注にこの話があるとし、『体源鈔』巻五にも「文選ノ注ニ云ク」として同様に見える。ただし『塵荆  
鈔』巻十には、二竜の鳴き声は「長笛賦」に直接見えるとしている。

又馬融、長笛賦ニ或時ニノ竜水中ニ鳴ク。然而登<sup>(33)</sup>天、其声微妙也。季長（原注・馬融子）聞<sup>(33)</sup>之彫<sup>(33)</sup>木吹<sup>(33)</sup>  
之、相似ス。又竹ヲ截テ吹<sup>(33)</sup>之、其声相似タリ。是ヨリ作笛始ト云ヘリ。故ニ竜笛在リ、又竜吟ノ曲アリ。

これも笛と水との関係を示すものである。ついで『塵荆鈔』巻十には

又或説ニ笛ト云人、七歳ノ時、帝位ニ即キ給フ。天下大イニ早（ヒデリ）シテ万民含レ憂事限ナシ。帝嘆給  
テ天ニ祈ニ、夢中ニ二ノ笛ヲ得給。是ヲ雨笛、早笛ト云。帝夢覺テ、彼雨笛ヲ吹バ雨降り、早笛ヲ吹バ天晴ル  
ト云ヘリ。此時ヨリ笛ハ始ルト云。

とあるが、これらも「玉もの前」に同様に見えるものである。笛が祈雨や止雨に有効な楽器であることを示すもの  
で、『古今著聞集』巻六・管絃歌舞・篳篥吹遠理、篳篥を吹きて雨を祈請の事に、源遠理が父に従って阿波の国に



行き、早魃に際して神社で箏篳を吹き、雨を降らせたとある説話を想起させる。根本千聡氏によれば、この遠理の話は『権記』寛弘四年（一〇〇七）二月の条に見える史実に基づいたものという。すなわち春日社参詣の折、遠理が箏篳を担当し、翌日に大雨が降ったというのである。<sup>(33)</sup> 雨笛・早笛は『古事記』『日本書紀』の海幸・山幸の話に見える、塩盈つ珠・塩乾る珠と同型である。

笛は日本においてより水と深く関わるものであった。菊亭本『文机談』第一冊では、水竜なる笛の仔細について、唐より本朝に渡す時、竜神がこの笛を惜しんで奪い、船を留めることになった。そこで竜神のために金千両を海に入れたところ、風波静まり笛は海上に現れたとあり、これも文選注に見える笛と水・竜神の関係を示すものである。この伝統は、『八帖花伝書』巻四にも、

（笛は）竜の姿を学び、水中に竜の鳴く声を聞き、竹に八つの穴を開け、八葉の蓮華と観念して、此声を学<sup>(34)</sup>ぶとある。ここでは笛は鼓と番えられ、大鼓は月に例えられ、笛は日を象る。胎藏界・金剛界に該当するともいっている。能の囃子を意識した表現であろう。

山梨県の笛吹川は川の流れの音が笛のように聞こえるからその名があるかと思われるが、地元の話では、権三郎という者が増水で行方不明になった母を毎日捜しながら、母の好きだった笛を吹くうち、自分も誤って溺死したという話に基づく川の名だという（角川日本地名大辞典・山梨県・笛吹川）。孝行譚の形式なので、近世のものである。

五  
琴

次に琴もまた琴の浦、琴の浜の地名が示す通り、波の音が琴に聞こえるという伝承を持っていそうである。琴ノ浦は和歌山市海南、琴ノ浜は石川県門前町剣地・鳥根県仁摩町仁万、琴ノ滝は京都府丹波町園部・和歌山県すさみ町滝住など、数が多いようである（『新日本地名索引』アボック社）。『古今和歌集』雑歌上九二二番の「からことといふ所にてよめる」という真せい法師の歌には、

宮こまでひびきかよへるからことは浪のをすげて風ぞひきける<sup>(35)</sup>

とある。「からこと（唐琴）」という地は、備前国の瀬戸内海に近い所にある。風が浪を緒として琴のように音楽を奏で、それが都まで通うとしている。『古今集』物名の四五六番にも、「からことといふ所にて、春のたちける日よめる」という安倍清行の歌がある。

浪のおとのけさからことにきこゆるは春のしらべや改るらむ

というもので、その情景は宮城道雄の箏曲「春の海」にも通じるものであろう。

琴について中国・日本の伝統的な考えは、『塵荆鈔』卷十・楽器管絃等事にも見られるが、そこにはまず琴の創始・沿革が見える。もとは西域の楽器であるが、震旦では伏羲が造った。その大きさ三尺六寸は三百六十日に象ること、上円下方は天地にのっとり、竜地八寸は八風を表わし、鳳池四寸は四時に通じるとして、楽器が宇宙を象徴していることを重視している。これも中国的な思想である。創始者には諸説あり、いくつか種類もある。『礼記』樂記には、昔舜が五弦の琴を作ったことを述べ、

天地之道、寒暑不<sub>レ</sub>時則疾、風雨不<sub>レ</sub>節則餓、…然則先王之為樂、以法治也、善則行象<sub>レ</sub>德矣。<sup>(36)</sup>

と、天地の理にのっとるために先王は音楽を作つて民を治めようとしたとし、音楽が天地の運行と関わるものであるとするが、特に琴が水とについての記述はない。中国があくまで強調するのは、音楽と天地の深い関係である。『文選』所収の嵇叔夜作「琴賦」でも、琴の制作法や琴の音の徳の叙述が中心である。したがって琴と水との関係は、やはり日本独特のものと思われる。

## 六 琵琶

『塵荆鈔』卷十の同箇所では、琴について、天地人・五行に則り、四弦は四時を表わす。胡国では馬上の樂である。また烏孫公主が造り始めたといった『風俗通』『釋名』『琵琶賦』などの中国文献を用いて説明している。これも中国では特に琵琶を水と関係させないが、この書では藤原貞敏が入唐して琵琶の秘曲三曲を伝授され、琵琶の名器玄象・師子丸・青山の三面を日本に持ち帰った。途中船は嵐に遭い、師子丸を海中に沈めてこれを鎮めたという説話を記す。この話の出どころは明確ではない。貞敏が入唐して、廉承武に琵琶を習い、玄象の琵琶を伝えたことは知られている（『教訓抄』卷一・卷八、『十訓抄』卷十等）。「師子」は笛の秘曲四曲の一つである（『十訓抄』卷十）。これは楽器を竜神が欲しがるといふ話の伝統に結びつけて作られたのであろう。『今鏡』昔語第九・賢き道々に、和邇部用光が紀伊国のはとりで、海賊に遭遇し、筆築の名手であったため、これをすばらしく吹き鳴らし、海賊を退けた話が見える。『十訓抄』卷十・『古今著聞集』卷十二という説話集のほか、『教訓抄』卷七・『統教訓抄』十一・『体源鈔』卷五などに記され、音楽の世界では好まれたものであった。この話の真偽は定かではないが、楽

器を欲しがる竜神伝説の延長にあるように思われる。琵琶の秘曲の一つ石上流泉（『教訓抄』卷八、『文机談』卷二等）は、流れる水をイメージした曲であろう。白楽天の「琵琶行」は、彼が尋陽の江で琵琶の音を耳にし、弾き手の女の身の上話を聞くという長詩であるが、ここには琵琶楽における流水の比喩がある。

忽聞水上琵琶声 主人忘帰客不発：間関鶯語花底滑 幽咽泉流水下難 水泉冷澁絃疑絶 疑絶不通声暫歇：  
銀瓶乍破水漿迸 鉄騎突出刀鎗鳴：<sup>37</sup>

あたりがそうであろう。水上の琵琶の音を聴き、私は帰ることを忘れ、客も出発を見合わせた。琵琶は鶯の囀りのように、またある時は氷の下を流れる水のように奏でられ、泉の水が滞っては演奏が途絶えたかと疑う。そして銀の瓶が割れて水が迸るように、再び演奏が始まり、戦場のような激しい曲調のあと、音は止む、というものである。

なお琵琶が宇宙や水辺と関わって説明されるのは、『三國伝記』卷第十十二・寛寛僧止「蒙」竹生島利生事に、

元記既ニ混ジテ後、清濁天地ト分シ始メ、沙子変ジテ現ニ琵琶、琵琶化シテ成ニ巨水。琵琶ハ則チ天女ノ三摩耶形也。湖海其ノ像也。故ニ志賀ノ浦ノ松ノ嵐ハ索々トシテ調ニ石上ノ呂律、筑「摩」江ノ急雨ハ嘈々トシテ奏ニ流泉ノ雅音。<sup>38</sup>

と、白楽天の『琵琶行』の一節を利用しながら、琵琶という楽器が宇宙と結びついていることを説いている。琵琶湖全体が楽器を演奏しているというイメージである。

## 七 結び

古来中国では楽器は天地を象っており、宇宙と関係するものであった。『周礼』卷二十三・宗伯礼官之職に、

掌六律六同之和。以弁天地四方陰陽之越。以為樂器<sup>(39)</sup>。

とある。こうして楽器は天地の運行に関係するものであった。日本でもこれの影響を受けて、『古今著聞集』巻六・管絃歌舞の序文に、

管絃のおこり、そのつたはれる事ひさし。清明天にかたどり、広大地にかたどる。始終四時にかたどり、周旋風雨にかたどる。宮・商・角・徵・羽の五音あり。或いは五行に配し、或いは五常に配す<sup>(40)</sup>。とある。

また日本では西日本を中心に水不足に悩まされることが多かったためか、ことさら楽器と水との関係が強調されたであろう。『三代実録』貞観十七年（八七五）六月二十三日に、

不<sub>レ</sub>雨数旬。農民失<sub>レ</sub>業。転<sub>レ</sub>経走<sub>レ</sub>幣。祈<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>仏神。猶未<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>嘉澍。古老言曰、神泉苑池中有<sub>二</sub>神竜<sub>一</sub>。昔年炎旱。焦<sub>レ</sub>草磔<sub>レ</sub>石。決<sub>レ</sub>水乾<sub>レ</sub>池。発<sub>二</sub>鍾鼓声<sub>一</sub>。応<sub>レ</sub>時雷雨。必然之驗也。於<sub>レ</sub>是勅遣<sub>二</sub>右衛門権佐五位上藤原朝臣遠経<sub>一</sub>。率<sub>二</sub>左右衛門府官人衛士等於神泉苑<sub>一</sub>。決<sub>中</sub>出池水<sub>上</sub>。正五位下行雅楽頭紀朝臣有常<sub>二</sub>鑾<sub>一</sub>諸樂人。泛<sub>二</sub>竜舟<sub>一</sub>。陳<sub>二</sub>鐘鼓<sub>一</sub>。或歌或舞。聒声震<sub>レ</sub>天<sup>(41)</sup>。

と、神泉苑の雨乞いに鐘と鼓を鳴らし、雷神を呼んで降雨を期したという。西角井正慶編『年中行事辞典』（東京堂出版）の「雨乞踊」では、これはひでりの時に太鼓・鉦につれて踊るもので、東日本の獅子舞、東京都多摩郡の鳳凰の舞、奈良県の太鼓踊、兵庫県のザンザカ踊、香川県の滝宮念仏踊、宮崎県の白太鼓、鹿児島県の太鼓踊などの例をあげている。仲井幸二郎他編『民俗芸能辞典』（東京堂出版）の「雨乞踊」では、戦国時代の『多聞院日記』に大和の布留神社を中心とした雨乞踊の記録が見えるとしている。

こうして楽器は日本の場合、雨乞いと深く関わることになる。平安時代の神泉苑での祈雨には舞楽が用いられて

いた。『教訓抄』巻一・乱声に、「青海波竜宮の楽也。又水音タリ。蘇志摩ハ蓑笠着テ舞ヘ「バ」、其姿雨ヲコウナルベシ。」という記事があり、日本では舞楽にも積極的に祈雨を求めたらしい。笹本正治氏の『歴史のなかの音音がつなぐ日本人の感性』（三弥井書店、令和三年）の第三章の「鐘淵の伝説」「雨乞いと鐘の音」も鐘と雨乞いの関係をあげている。そして同「鑄物師に対する意識」では、鐘があゝの世とこの世を結びつけるものであり、それを作る鑄物師は特殊な能力を持つ人達であることを述べている。鐘の鑄物師に関する伝説もドイツには多い。

日本は水に恵まれた国で、山島国による急流が多く、その流れの音に魅せられ、楽器のように感じてきた伝統があるのであろう。それとともに水の流れる音が楽器に聞こえるという表現は、古くから日本で流行していた現象であらう。さらに日本は四方を海に囲まれ、波の音も楽器に聞こえることがあった。そこには日本人の水、山川、海辺への愛着が感じられる。これらは中国とも異なる日本の独特の風土がある。

昔の人は今と違って音に敏感であったように思われる。それは物静かでした頃としていた頃の日本を背景としている。筆者も田舎で育って、夜になって遠くから汽車の音がよく聞こえてきた。また古人は音そのものに神秘的なものを感じたことも確かであらう。もともと水は豊作をもたらすものであり、火災を鎮めるものでもあった。ガストン・バシユールの名著『水と夢・物質の想像力についての試論』（小浜俊郎・桜木泰行訳、国文社、昭和四十四年）は水の物質的な正確に注目し、水についての人間のさまざまなイメージを取り上げるが、水と音楽・楽器の論は見当たらない。この種の考えは東アジア的なものと言えるようである。

## 注

(1) 『日本舞踊辞典』東京堂出版。上野誠「万葉歌の内と外と―大宰府文学圏の点と線―」（日本文学協会「日本文学」令和三年二

月号)の「二鍾崎と沈鐘伝説」参照。

- (2) 近世実録全書第11巻、早稲田大学出版部、一九二八年
- (3) 「説話文学研究」第二号、昭和四十三年十二月
- (4) 大笹吉雄『日本新劇全史 第一巻 明治〜終戦』白水社、平成二十九年
- (5) 「沈鐘伝説についての一考察」『日本民俗学』第九十六号、昭和四十九年
- (6) 鈴木滿訳・注「ルードヴィッヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』試訳」(『武蔵大学人文学会雑誌』第四十四巻第一・二号(平成二十四年十一月)〜第四十八巻・第二号(平成二十九年三月))による。
- (7) 中河原理篇『ピアノ曲鑑賞辞典』東京堂出版、平成四年
- (8) 以下、古典文庫による。
- (9) 『中国神話の深層 天地の循環図曼荼羅の世界』五・銅鼓とその周辺(四二四頁)三弥井書店、令和二年
- (10) 小野勝利訳の東洋文庫による。
- (11) 『中国の伝承曼荼羅』第二章雷神研究、三弥井書店、平成十一年
- (12) 『中世の音・近世の音 鐘の音の結ぶ世界』第四章・雨乞に用いられる鐘 講談社学術文庫、平成二十年
- (13) 拙稿「祈雨と中世の芸能」(久保田淳編『論集 中世の文学』(明治書院、平成六年)
- (14) 影印文淵閣四庫全書一〇四二(台湾商務印書館)による。適宜読点を附した。
- (15) 影印校注古典叢書(新典社)による。
- (16) 国学基本叢書068(台湾商務印書館)による。
- (17) 梅軍校疏『漢書五行志校疏』巻一・五行志上(中華書局)による。
- (18) 貝原益軒全集による。
- (19) 謡曲二百五十番集(赤尾照文堂)による。
- (20) 小林「世阿弥晩年の作品」(『観世』昭和十八年十月)、竹本「作品研究 天鼓」(『観世』昭和五十年七月)。
- (21) 「天鼓と星」『能』昭和二十三年七月号
- (22) 「天鼓の成立に関する考察 中国の思想・伝説を中心として」『文学』昭和三十一年九月号
- (23) 臨川書店刊による。

- (24) 能勢朝次『能楽源流考』(岩波書店、昭和十三年) 四〇二頁
- (25) 岩波文庫『日本書紀(三)』四十五頁
- (26) 新編国歌大観(角川書店)による。
- (27) 私家集大成第二卷(明治書院)による。
- (28) 新日本古典文学大系『中華若木詩・湯山連句鈔』(岩波書店)による。
- (29) 「室町の笑い―謡文化のかたち―」「中世文学」第五十号、平成十七年六月。なおこれに先立つ同氏の「抄物から咄・雑談へ―歌謡をめぐる雑談―」(『伝承文学研究』第六十三号、平成二十八年八月)にもこのテーマが簡単に触れられている。
- (30) 日本古典文学大系『謡曲集・上』(岩波書店)による。
- (31) 日本思想大系『古代中世藝術論』(岩波書店)による。
- (32) 古典文庫による。
- (33) 「院政期の筆葉をめぐる説話と秘曲伝承」「説話文学研究」第五十七号、令和四年九月
- (34) 日本思想大系『古代中世藝術論』(岩波書店)による。
- (35) 以下、新編国歌大観(角川書店)による。
- (36) 新釈漢文大系(明治書院)による。
- (37) 吉川幸次郎・桑原武夫著『新唐詩選続篇』(岩波文庫)による。
- (38) 中世の文学(三弥井書店)による。
- (39) 四部備要(中華書局)による。
- (40) 新潮日本古典集成(新潮社)による。
- (41) 新訂増補国史大系(吉川弘文館)による。